
心の中は空

新咲美羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の中は空

【Nコード】

N5915H

【作者名】

新咲美羽

【あらすじ】

今まで20年間ダラダラと時を過し、人には全く興味がない『美崎アウラ』。そんな彼の人生は……。そんな彼が懐かしい高校時代について振り返ってみる。アウラの無関心人生が今、始まる!!! しかし、そんな彼には悩みがたくさん存在した。

第1話 プロローグ

「今日何日だったかな。」俺はふと考えた。そして、これが俺の一日の始まりでもあると同時に終わりででもあるのである。常にダラダラとした時を生きる俺にとっては日常茶飯事だ。そう、俺の名前は美崎^{みさき}亜羽羅^{あいうら}二十歳である。今の俺はとある大学に通う三年生である。

中学・高校・大学と今まで何も考えずヒトに興味もなく、過ごしてきたしまった。

俺はいま、大学三年生になってやっと自分というものに向き合うことになった。向き合うにあたり、自分の価値とは何なのかそれを考えている。

人の価値とは何か？「財産？経験？恋愛？家柄？学歴？」などと色々と考えてしまうのである。その考えた自分の価値観を自分と照らし合わせてみる。そうすると、何ともピタリと一致しないのである。それもそのはずである。今まで俺は何も考えずヒトに興味もなく、過ごしてきたしまったのだから……。

周りの人からみたら確かに俺はリアルを充実しているのかもしれない。しかし、そこに充実感が存在しないのだ。それはその一つ一つに俺の「心」、いや、「魂」といつてもいい。

それが俺の中に存在しなからだ。そんな、俺には絆と呼ばれるものは誰も存在しない。いや、絆になりかけつつあるものが昔、俺にはあったはずだ。

しかし、それが全くと言っていていいほど思い出せない。と考えつつ俺は眠りについたのであった。

夢の中……。ここはどこだ。あ、ここは見覚えのある景色。しかし、建物の名前が思い出せない。でも、ここには来たことはある。あれは誰と来た時のものだろうか？

そうだ。俺の昔の彼女と着た場所だ。初デートの場所に間違いない。初デートになるまでも大変だったのだ。彼女の名前は何と叫びたか……。確か「浦城麻美ウラキマミ」という名前を記憶の片隅にある。

俺はすでにその頃から何にも興味のない生活を送っていたのだからデートになる前も半年以上ずっと携帯のメールをやりとりのみであった。学校で同じ授業になっても話すこともない。ただただ、授業を受けているだけの仲だった。

俺は何と声をかけていいのか分からなかったのだ。人と接するということから遠のいていた俺の引き出しには何も詰められてはいないのであった。

引き出しに唯一入っていたのは「相手の様子を見る」という一枚のカードだけだったのを今でも覚えている。そんな俺はいつもこう考えてしまうだ。もし、俺がこの人と話をして仲良くなる。その後、付き合うことになるかもしれない。

しかし、何も入っていない引き出ししか持っていない俺にはこの人を幸せにすることはできないんじゃないか？いつか必ず不幸にして

しまうのではないか？そう考えている内に俺はまた、自分の「不安・恐れ」という殻に閉じこまってしまふのだ。

しかし、俺のそんな殻を徐々に砕いてくれる人と出会うのだ。相手にはそんなつもりではなかったかもしれない。でも、俺にとってはそう感じたのだ。そんな昔の彼女を思い出していた。

そして、ここからアウラとアサミの物語は始まっていくのであった。

第2話 万能との出会い

あれは高校3年の春くらい。まだ、暑くなる前の過ごしやす時期だった。

その時にとある女のことを耳にするのであった。

「よ。アウラ。あいつのこと聞いたか？」

「あいつって誰だよ」

「お前、浦城の話は有名だろ。知らないのか。」

「そんなこと言われてもな。」

「あいつ、水泳の地区予選大会で優勝したらいぞ。凄くないか？」

「お前、何言ってるんだよ。別にそんなに凄くはないだろう。うちの学校って結構スポーツのできる部活多いしさ。」

「アウラこそ何を言ってるんだよ。あいつはこれで陸上・テニスに続いて3つ目なんだぞ。」

「そして、何より可愛いんだぞ。学校で知らないのはアウラくらいなんじゃないのか？」

「ま、確かにそれを聞くと凄いとは思っけど、それがどうかしたか？特に仲の良い知り合いってわけでもないし、他には何も感じない

な。」

「でたでた。アウラの無関心主義」

「いや、でたでたって言われても興味ないものは興味ないんだからしかたないだろう。」

「キーンコーンカーンコーン」

「おい、もう予鈴なつたぞ。席につかなくていいのか？」

「ヤベ。んじゃアウラまた後でな。」

今、俺に話をかけてきたのは俺の中学からの連れで名前は『中島聖^{なかしまま}』^{きと}人』普段から、俺を理解してくれる数少ない友人の1人である。

そして、今の話に出てきたのが、学年でスポーツ万能な女、『浦城麻美』というらしい。

普段の学校の事情に詳しくもない俺が耳にするくらいだ。相当有名なのだろう。

しかし、俺にはそんな女もいるのか。ぐらいにしか感じていなかったのである。

（えーと、今日は5限までだったから4時前までには学校からでられるな。ってことは家に着くのは4時30頃か）などと俺は考えていた。

本来、俺も部活動というものに所属しているのだが、今日は顧問の先生がいなかったため活動はなかったのである。

そんな、俺の帰り道、自転車の置いてある駐輪所まで歩いていると、遠くの方から声が聞こえてきた。

「x 先輩〜〜頑張ってください」

(どこの部活だ。ってか何言ってるかよく聞こえないな。)

そして、普段、こんな声は無視して帰る俺なのだが、この日は立ち止まり声の聞こえる方に視線を向けて見た。

そうするとさっきまでは聞き取れなかった声が聞き取れるくらいまでになってきたのだ。

「麻美先輩〜〜〜ファイト〜〜〜」

(なるほど、あいつが聖人の言っていた運動万能女か。確かに聖人の言っていた通りルックスも悪くはない。もてそうなタイプだが、俺には関係ないな。)

と思い、俺は再び足を進め始めたのであった。

次の日、朝練のある俺は学校に着いた。

実際、俺は運動に興味があるわけでない。

では、そんな俺がなぜ、運動部に所属しているのかというと、この高校は1年次に必ず部活に入らなきゃいけないという校則があり、迷っている俺に聖人がこう話してきたのがきっかけである。

「おい、アウラ部活決まったか？」

「いや、まだだ。むしろ、入らなくてもいいだろう。運動に興味ないし。」

「んじゃ〜決まっていなんだな。よし、バレー部に入るぞ。」

と、半ば強引に男子バレー部に所属させられたのである。

そして、なんだかんだで俺は3年間続けてしまったのであった。

そのバレー部の朝練に向かっていている俺の目に走っている人が映ったのだ。

（ん？あいつは昨日、どこかで見たような……。あつ。あいつは運動万能女か。）

「ま、そうだろうな。いくら万能っていったって練習なしにいい成績はだせないよな。」

「おい、アウラ。何を一人でぶつぶつ言って・・・」

「あそこで走ってるのは浦城じゃないかあいつも頑張ってるな。」

「よし、アウラ。俺らも早く朝練行こうぜ。」

そう言うと聖人は走って行った。

(何をそんなにがんばる必要があるのか俺にはよくわからないが、俺にも朝練があるのは確かだからな急ぐとするか。)

そして、朝練が終わり、自販機の前で俺と聖人が座っていた。

遠くの方から登校する生徒達も現れはじめ下駄箱が込み始めてきた。

「んじゃ俺らもそろそろ登校しますかね？アウラどの。」

「わかったわかった。んなこと言ってねえでとっちと行くぞ。聖人。」

「そんな怒らんで下さいよ〜アウラ殿〜」

と聖人のいつもの茶化しが入り教室に行くことにした。

教室に向かうための階段の最中で、俺はバックのチャックが開いていて、携帯電話がないことに気が付いた。

「わり〜聖人、携帯どっかに落としたっばいから先に行って俺のバック机の上に置いていてくれ。」

「了解。たぶん、自販機のとこじゃね。」

「わかってる。んじゃ頼んだぞ。」

自販機の前に着いた俺は探してみるがどこにも見当たらない。

(やばいな〜早くしないと朝のHRに間に合わなくなちまうな。)

つとそこに1人の生徒が声をかけてきたのだ。

「美崎君、何か探し物でもしてるの?」

「あ〜ちょっとな。(この忙しい時に話しかけるなよな)」

「ひょっとして、この携帯電話じゃないの?」

「えっ。おう。これだこれだ。」

「ありが……。」

「どうしたのよ。人の顔なんてじっと見て。」

「どうして、万能女が俺の携帯を……。」

「ちょっと、美崎君。一応、私はあなたの落とし物拾った人なんだけどな。」

「万能女って失礼じゃないの。」

「あつ。悪い。声出してたか。ってかお前、何で俺の名前を……?」

「何々、次はお前呼ばわりなわけ。とりあえず、私に何か言うことあるんじゃないの?」

「ありがとうございます。」

「分かればよろしい。」

「あつ。美崎君、早くしないとHRに間に合わなくなっちゃうよ。」

「マジだ。とりあえず、急がないとな」

これが万能女との出会いだった。

第3話 疑問と答えと大会と

(ふゝぎりぎりHRには間に合ったな。それにしてもあいつ、何で俺なんかの名前を……)

俺のななめ後ろから肩を突かれる感じがした。そして、振り向いてみると。

「アウラ、危なかったな。」

「あゝ助かったわ。聖人、サンキューな。」

「ま、言いつてことよ。それにしてもアウラ来るの遅かったな。」

「なんか万能女に話し掛けられてよ。」

「ん？万能女って誰のことだ。」

「あつ悪い。浦城麻美のことだ。なんか運動が万能らしいからな。」

「なるほどな。ってアウラ、浦城と話したのか？」

「何か変か？会話くらいするだろ。普通なら。」

「アウラって鈍いな。普通じゃないから反応してるんだろ。」

「俺、あいつが男としゃべってるところとか見たことないもん。」

「おい。美崎と中島。さつきからずつとしゃべってるが俺の話聞
いてるのか？」

（やばい。担任の大島に注意されたか。どうすっかな。）

すると、聖人はすつと立ち上がった。

（おいおい聖人、何するんだよ。）

「はい。大島先生。しっかり聞いてました。今日の5限のLHRは
来週、行つ球技大会についてですよ。」

「そうだな。よく聞いてたじゃないか。中島」

「今、中島が言ったように5限は球技大会についてだからしっかりと
話し合うように。」

（聖人って器用にこういうことこなすんだよね。改めて実感する
わ。）

「さすがだな。聖人。」

「どうしたアウラ？あついう場合は話の要点だけ聞いて返せば深く
は聞いてこないんだよ。」

「やば、アウラまた大島がこつち見てる。」

「話の続きは昼休みにでもしようぜ。」

「ああ。わかった。」

「キーンコーンカーンコーン」

（ふ〜。やっと終わったか。んじゃ〜飯でも食いにいきますか。）

「よっこひせ。っど。」

「アウラ、ちょっと待て。お前どこに行くんだよ。」

「おう、聖人か。どこについて飯に決まってるだろう。」

「そうそう。俺もそれについては同意見だ。しかし、何か忘れてることはないか思い出してみようかアウラ君。」

「あっ。」

「思い出したか？」

「ん〜わからん。」

「でたでた、すぐ、色んなこと忘れるんだからさ。浦城の話だよ。」

「浦城が男としゃべることなんて珍しいんだからさ。アウラ、いつ、浦城と仲良くなったんだよ。」

「んや、俺もわからん。ましてや、俺は相手の名前すら昨日まで知らなかったんだしさ。」

「確かに。ってことは浦城の方がアウラのことを好きなんじゃないのか？」

「待て待て。聖人。それは話がぶっ飛び過ぎだ。」

「たぶん、あの万能女は俺の携帯電話を拾いその中身を知ったんだろ。」

（いや、待てよ。万能女の話し方は……。ま、違うな。俺を興味を持つ意味もわからん。）

「それで、何かを探している風だった俺に話しかけてきたってが一番妥当な答えではないのか？」

「ま、そう、聞くともうだったと思えてくるな。」

「だろ。そういうことなんだよ。」

「んじゃ〜今回の出来事はそういうことにしておこうか。」

「話は変わるが、アウラは何の競技に出るんだ？」

「球技大会の話か。特には決めてないが適当に気分で決める。もしくは、余ったやつでいいわ。」

「え〜。アウラ。せっかく今回の競技にはバレーボールもあるんだから出ようぜ?。」

「いつも、人数制限がかかるだろう?。」

「まだ、バレーボールの人数制限も聞いてないのに諦める早過ぎだぞ。」

「それだったら、こうしよう。もし、人数制限が2人以上だったら俺と聖人はそれに出る。」

「人数制限が1人だったら、俺は適当に出る。これに異論はないな。」

「了解いたしました。やった。」

(聖人のやつ、もうバレーに出る気になってやがる。)

「キーンコーンカーンコーン」

「ガラガラ」。それじゃ、みんな席に着け。これからLHRリンクホームルームを始める。」

「球技大会の実行委員は前に出て話をすすめる。」

「では、始めます。今回の球技大会は × ○」。

(あれ？今は確か5限のLHRだったはず。ん・・・？)

(もう、終わりの10分前。 ってことは俺、まさか・・・。)

「その通りだよ。アウラ。」

と、俺の心を見透かしたかのように聖人は俺に話しかけてきたのである。

「何がだ？」

「アウラは始まったと同時に寝ちゃったんだな。」

「だから、アウラの出る競技は俺が推薦しておいたから。」

「ってことはまさか……。」

(ふ)。やっぱり、バレーボールのところに俺の名前がある。ん？
なんだあれ。)

「おい。聖人、あれなんだよ。」

「アウラ、それはじょうがないことだよ。寝てたアウラが悪い。」

(くっ。反論できない。なんで俺がリーダーになってるんだよ。)

「だから、放課後の集まりよろしくな。」

「は？。放課後に集まりなんてあるのかよ。」

「頑張りなよ。リーダー。」

(ついてないな。くそ。なんで寝ちゃったんだ。いいや、考えてもしょうがない。過去のことなんて。行ってくればいいか。)

「では、これにて球技大会の話を終了したいと思います。リーダーになった人は放課後に各教室にいつてください。」

こうして、俺は5限に寝てしまうという大きなミスをしてしまう。それにより、放課後にリーダーとして、駆り出されることになった。

(え〜と、俺が行く教室は3階の多目的室だったな。早くいつて済ませよう。)

「あつた。ここか。」

「ここね。」

と、女の声が後ろから聞こえてきた。

(ん？誰だ。)

そう思い、俺は振り返って見る。

(あいつは……。万能女。)

「あつ。美崎君じゃない。」

「美崎君もリーダーだったんだね。」

「早く中に入るうよ。」

「どっしたの？」

（こいつ、よくしゃべるな。あつて続けざまに4連発だぞ。聖人の情報、完全に間違ってるんじゃないのか。）

「いいから、中に入れよ。」

「あつ。ゴメン。」

（俺は完全に驚いている。何につて？この万能女がこんなに舌のまわる女とは思わなかったからだ。）

（もっとクールな女かと思っていたからだ。）

「つて美崎君、聞いている？」

「ん？聞いている。で、何の話だ？」

「聞いてないんじゃない。」

「だから、朝の私のこと万能女って言ってたでしょ？」

「言ったな。」

「あれ、何なの？私そんなに色々なこと出来ないんですけど。」

「あれは俺がつけた。おまっ・・・浦城って運動万能女だからさ。すなわち万能女なわけだ。」

「今、また、お前つて言いかけたでしょ。」

「言っていないんだからいいだろ。あんま、気にするな。」

「それより、俺も浦城に聞きたいことがある。」

「何？」

「何で浦城は俺の名前を知ってたんだ。」

「俺は浦城ほど有名でも何でもないのに。」

「……。」

「……。」

（なんだ？この間は。）

（俺は何か聞いちゃいけないことでも聞いたのか？そんなことはないはずだ。）

「こんなこと言っちゃ失礼かもしれないけど、美崎君って運動を全力でやってないんじゃないのかなって思っただ。」

（ま、たしかに全力って言うほどではやってないけど。それがどうしたんだ？）

「だから、気になっちゃって。」

「部活の友達とかに美崎君のことを聞いたの。」

「そんなやつなんてたくさんいるんじゃないのか？」

「でも、みさ× が 干 たんだもん。」

(こいつ、急に声小さくなって何言ってるか全くわかんね〜。)

「いいか、バレーボールについてはこういうことになった。何か質問のあるものいるか？」

「なければ、終わりにするが……。」

「よし、終わり、解散とする。何かあれば、また召集をかけるので来るように。」

「ハイ。」「はい。」「はい。」

「んじゃ。浦城。」

「えっ。美崎君。ちょ……。」

そうこうしているうちにリーダーの集まりは終わってしまった。

結局、あの万能女が俺の名前を知っている理由はよくわからなかった。

それでも、無事にリーダーの集まりが終わってよかった。

浦城は何かを最後に言いかけたが俺はそのまま去ることにした。

第3話 疑問と答えと大会と（後書き）

新咲美羽です。皆さんはじめまして。

最近、小説を書き始めたばかりなので皆さんに意見をしてもらえる
と今後の執筆活動の参考になると思っています。

ここはダメだとか、もっとこうした方がいいのでは、ここは読みず
らいなどのダメだしでもいいので協力してくれると嬉しいです。

第4話 球技大会ともう1つの戦い

こうして、昨日は浦城と少し話した俺は学校に行くため自転車をこぎながら曲を聞いていた。

(昨日のあいつ、最後はなんて言おうとしてたんだろう?)

と少しは気になっていたが、アウラはすぐ、いろいろなことを忘れてしまうのでこれもすぐに忘れると自分自身で自覚していた。

「キキー」

「ガチャ」

自転車を止め。駐輪所から歩きだした。

(毎日、毎日、学校って大変だよな。何でこんなに来なきゃいけないんだよ。)

本来だと朝練があってもよさそうなのだが球技大会の準備で体育館競技だけはできなくなってしまっているのである。

そんなわけで俺も朝練がない感じの登校時間で学校に来ているのである。

「おはよ〜す。アウラ。」

「よ。聖人。」

「昨日のリーダーの集まりどうだった？」

「ああ。バレーボールのルールとかそんな説明だったな。」

「後は……。あの女もバレーのリーダーだったな。万能女。」

「へえ〜浦城もリーダーだったのか。」

「浦城とは何かあったのか？しゃべったとか？」

「そつだ。聖人。あいつ、別に男としゃべったことないなんて嘘だろ。」

「昨日はガンガン俺と話したぞ。」

「えつ。浦城がお前と普通に話してのかよ。いや、そんなことはない。前からあいつは男としゃべってるイメージはないな。」

「そうなのか。じゃ〜次会った時にでも聞いてみるからいいや。」

「そつか。浦城としゃべったのか。アウラ殿は。いいな〜。俺も麗しの姫としゃべってみたいものじゃの〜。」

「おい。もう茶化しモードに入ってるじゃね〜か。」

「あれ？アウラ、今日は浦城、校庭にはいないな。」

「おいおい。急に素に戻るのやめろよ聖人。こっちが対応できなくなる。」

「悪いね〜アウラ殿。」

「いや、別にふりじゃね〜から普通に話してくれ。」

「そうだな。こっちのが話しやすいし。で、浦城がいないなんてめずら……。」

「あつ。めずらしいなんてことはなかった。」

「たぶん、今日の朝練は水泳の方に出てるのか。」

（あ〜。たしかにそれだったら、納得だな。それにしても、あの万能女も大変そうだな。）

（毎日、色々なことやって。ま、俺には関係ないからいいか。）

「おい、聖人。もうそろそろ急がないのと時間ヤバくないか？」

「そうだな。」

「キーンコーンカーンコーン」

「では、ホムルームHRを始める。」

「リーダーは昨日お疲れだったな。長いところは18時くらいまでやってたらしい。」

（うわ〜長いな。俺らは40分くらいで終わったから17時前には終わっていたのに。）

「あと、来週の球技大会についてだが、バレーボールに出るやつでネットの組み立てのわかるものは放課後体育館に集合してくれだど。」

「特に美崎。お前は行ってきてくれ。」

（えっ。俺かよ。なんで俺が・・・。）

「お前はバレーに出るし、バレー部の部員だし、リーダーだしな。」

（やっぱり、そういう理由か。だろうとは思ったがだるいな。どうせ大島のやつの独断だろうけどさ）

「わかりました。」

「他にも出れるやつはしっかり出るように。」

「では、1限に間に合うように移動しろ。」

「な〜。聖人。1限ってなんだっけ？」

「ん？たしか、進路についての話で3年は体育館に集合だな。」

「進路か。アウラは進路について決めたか？」

「ああ。かなり前に1年か2年の頃に大学の説明会があったら。」

「その時にちょっと気にいった大学があったからそこに行くことにした。」

「へーアウラってなんだかんだでしたっけ先のこと考えた生き方するよな。」

「感心するな。聖人は俺と違って頭いいんだから大丈夫だろ。」

それもそのはず。聖人は学年でいつもトップクラスの成績を残している。

ま、俺はというとクラスで10番台とかだな。学年では約200人中70番台とかのいたって中なのだ。

「それに、あの時はそれが1番いいと思ったからそこを調べたんだよ。」

「俺は先に先にやらないとダメだからさ。」

「おい。美咲と中島、早く前に進めよ。」

「おっ。」「わりい。」「悪い。」

「え〜だから皆さんも今は大学も専門も就職も厳しくなってます。なので × \$%&#」

「な〜。聖人。大体こういうやつらの話って長すぎじゃねか？」

「それに対して参考にもならねえし。」

「ま〜そうだな。アウラ。でも、一応、参考程度には頭の中に入れておいた方がいいんじゃないのか？」

「そういうもんか。」

「そういうもんなんだよ。」

こうして、俺らは長すぎる話を30分以上聞かせられることになり、たっているのもだいぶ辛かったのはいうまでもない。

「では、皆さんもこのようにして話を聞いて先に先にと行動するよ。以上をもちまして、話を終わらせていただきます。」

「やっと終わったか。あ〜あだるかった。」

「疲れた〜。」「長すぎだよ〜。」

周りのやつらも同じことを思っていたらしい。

「ま、みんな考えることは一緒か。」

「キーンコ〜ンカ〜ンコ〜ン」

「では、これでHRは終了します。」

ホムルーム

「朝、言ったとおり、美崎。よろしくな。」

「はい。わかってます。大島先生。」

（完全に忘れてた。いかなかったら俺、明日どうなってただろう?）

「おい。聖人。早くいくぞ。」

「わかってる。ちょっと待てよ。」

「やっときたか。3組の美崎だな。あと、中島か。」

「二人とも指示とか組み立て方とかいろいろ頼むな。」

「はい。」

そして、俺らは簡単にネットの組み立て方とかいろいろな指示や説明をした。

「おい。アウラ。あそこに浦城もいるじゃん。」

「そうだな。」

「浦城の隣にいる女の子も可愛いな。あの子の名前はなんて言うんだらう。アウラ知ってるか？」

「聖人。お前が知らないのに俺が知ってるわけもないだろ。」

「たしかに。」

「んじゃ〜聞いてこよう。」

（あいつ。行動はえ〜。つてもう聞いてるわ。）

「えっ〜と。浦城さんはあれをやってほいんだけど。」

そついうと聖人はネットを指差しながらネットを持ってきてほしいという指示をしているらしい。

「もう一人の名前は〜」

「篠本美琴（しのもみこと）です。はじめまして。」

「これはこれは〜丁寧には俺は中島聖人です。よろしく。」

「んじゃ、篠本と浦城はさっき言ったやつを頼むよ。」

「アウラ〜。篠本美琴さんだつて。」

「ふ〜ん。」

「相変わらずの無関心ぶりだな。」

「まゝな。名前を知ったところでって感じだしな。」

そして、30分後には体育館に2面のバレーボールのコートが完成しているのであった。

「出来た〜。」「完成した〜。」「疲れた〜。」

「聖人。意外と時間がかかったな。」

「ま、しょうがないだろ。いつもやってて慣れてる俺らとは違うんだしな。」

「んじゃ、みんなお疲れ様。解散でいいぞ。」

（つてあの先生いままでどこにいつてんだよ。ふらつと出てきやがって。）

「はい。」「は〜い。」「了解です。」「帰ろつぜ。」「

「ちょっと美崎君。話があるんだけど。」

（こいつは……。万能女。なぜ、俺に話が。意図がよくわからな
い。）

「なんだ。」

「なんだ。じゃないわよ。昨日の私の答えを聞いてないから話してもらおうよ。」

「特に答えるようなことは聞かされてないと思ったけど。」

「はあ。やっぱり、最後の話、聞いてなかったのね?」

「そういえば、聞いてなかったな。なんていったんだ?」

「球技大会で私と勝負しましょう。っていったのよ。」

(いやいや、こいつ、勝負しましょうって。男と女じゃ勝負できないだろ。分かれて戦うんだから。)

「どごちって?」

「もちろん順位ですよ。」

「勝負したらなんかあんのか?」

「そうね。なんかあった方がいいから何かかけましょうか。」

(わざわざ、勝負なんてめんどくせいな。球技大会ものらりくらりやりたかったのに。)

「ちょっと、めんどくさいとか思わないですよ。」

ドキッ

(こいつ、読心術でも持ってるか?)

「んなことは思ってねえけど、なんで勝負なんかするんだよ。」

「とにかく、勝負よ。わかった？」

「ああ。わかったわかった。じゃ〜それでいい。」

「おい。アウラ何を話してんだ。」

「おう。聖人。えつ〜と、うらきが」

「んじゃ〜美崎君そういうことでよろしく。」

（なんだ？あいつ？あわただしい奴だな。）

「なんか浦城と俺が勝負することになったらしい。」

「浦城さんがね〜。珍しいこともあるものだ。」

聖人がにやついた顔で俺をじっとみている。

「なんだよ。気持ち悪いな。」

「べっつに〜。」

「特に用事もないなら帰ろうぜ。」

「そうだな。んじゃ、いくとするか。」

「来週のしょっぱなから球技大会だ。頑張ろうぜアウラ。」

「あゝ。」

第4話 球技大会ともう1つの戦い（後書き）

皆さんおはようございます。新咲美羽です。

私の小説は楽しんでいただけていますでしょうか？

ついにアウラと麻美に出会い。そして、2人の今後の展開は？戦いは？

次回は球技大会での話を書くと思います。

第5話 予選と感情

月曜日を迎えた俺達の学校はまだ、朝練を始めるくらいの日曜日だ。というのにおおいに盛り上がりを見せていたのだ。

部活がない俺がこの時間に登校しているのというと、今日の球技大会のせいなのである。俺が出るのはバレーボールの競技のだがみんな当日の朝は練習したい要望が俺によせられた。

そのせいで、俺は来たくもない朝練の時間に登校させられたのである。

(はあ〜こんなことしたって何も変わらねえよ。どうして、みんなこんなことやりにゃあ〜)

「あ〜ねみい〜」

「リーダー。しゃきつと」

「あ?」

振り向くとそこには見慣れた顔が一つあったのだ。しかし、オノノ聖人のやつも眠そうだな。

「別にしゃきつとなんてしないでいいだろ。何でこんな早い時間から登校しなきゃいけないんだよ。」

「みんなでなんかわいわいやりたいんだよ」

「ふ〜ん。そういうもんなんだ。俺にはよくわからないが」

俺たちは歩きながらそのような話をして階段を上って行った。階段を上り終えたところで俺らのクラスの男子がバレーボールで遊んでいた。いや、練習していた。

「美崎達やつと来たぞ」

そういいながら、そいつはこっちにボールを俺に向かって投げるのであった。俺はそのボールを避けた。後ろから声が聞こえてきたのだった。

「おい、アウラ。何でボール避けたんだよ」

「いや、つい反射的に。それより聖人、ナイスキャッチ」

はあ〜やれやれ。って、言いたそうな聖人がボールを持ったまま近づいてきた。

「んじゃ、みんなで練習しますか」

聖人はみんなそう言って朝の無駄な運動がスタートしたのである。かれこれ約1時間はバレーボールもどきをやっていたと思う。スパイクの打ち方を習ったり、トスやレシーブ。サーブの仕方など俺らから教わっていた。

（これで、みんなができるようになったらみんなはどんだけ、すげえんだよ。いや、そう考えると教えた俺らの方がすごいのか？）

そんなことを俺は頭の中で考えていたのである。そして、みんなを良く見てみるとだいぶ疲れはじめていた。

聖人のやつは熱中しすぎてそれに気づいていないのだろう。

「な、聖人。ちょっと休憩しないか？疲れちゃって」

「疲れちゃって。って、普段のアウラならこれくらい簡単にやっつんだろ。」

「ん〜。しいて言うなら俺ではなく周りかな。」

俺の言葉を聞いて聖人は周りを見た。俺と聖人以外のみんなはアスファルトに倒れ込んでいる状態だ。

「そうだな。みんな休憩にするか」

「待っていました」「ノド乾いた〜」「疲れた〜」

などという声をみんながあげたのは言うまでもない。そして、俺は時計を見た。時計は8時10分を指していた。あたりを見回してみると他にやっていたクラスの男達や女達も次々に自分のクラスに戻っている。

(そろそろ終わりにして、着替えてHRホームルームに行けばちょうどいいんじゃないのか聖人)

聖人がみんなを自分の方に集めた。そして、俺もみんなも近寄っていく。その光景はまるで甘いものに群がるありのような光景だった。

「そろそろ、終わりにしてクラスに戻ろうか」

（えっ。みんなを呼ぶほどの話ではないだろう。っと、俺は心の中で突っ込んだ。）

そうして、俺達はクラスに戻り始めた。

「キーンコーンカーンコーン」っと、予鈴がなった。

いつものように大島先生が教室に入ってくる。「ガラー」っという音と共に現れた先生の第一声はこの言葉だった。

「みんな気合い入ってるか？今日の球技大会は全種目1位狙ってるぞ」

「わかったな？」

（ふー。あの先生はバカか。このクラスの生徒が全員出るっていうのに全種目で1位なんて獲れるわけがないだろう。）

「今、ここで1位なんて獲れないって思ったやつ。そんな、気持ちだからダメなんだぞ」

（ドキ。大島のやつ心が読めるのか？前にもこんなことが1度あったよんな気がするな。）

そうしているうちに、球技大会の開会式のために全校生徒は体育館に集まった。体育館の中には人、ヒト、ひと。右から左まで人がずらりと並んでいた。そう思うと案外、この学校も人がたくさんいるなど感じる俺がそこにはいた。

「では、今から開会式を始めます」

司会の女がそう言うと球技大会の開会式は始まった。

俺はその言葉を合図に睡魔に襲われいつの間にかに眠りにつくのであった。

そして、気持ちよく眠っていた俺を揺らしてくる奴がいる。誰だ。せつかく俺が寝ているのにそう、思いながら俺は重い^{まぶた}瞼をあげた。

「おい。アウラ。しっかりしろよ」

「おう。聖人。おはよう」

「おはよう。じゃねえよ。とつくに開会式は終わっちまってるぞ」

「おう。わりい。わりい。睡魔との闘いに負けちまってよ。でも、バレーボールでは負けないからよ」

「アウラ。お前って時々おかしくなるよな」

「そんなことはいいからバレーボールの準備をしろよ」

「ああ」

俺らのクラスのバレーは第1試合ということでみんなが体育館からどいた後ですぐに開始されることになっている。

そして、この試合は第1試合ということもあり、まわりに人がたく

さんいる。

その中にはあの万能女ほんのうおんな、すなわち浦城の姿もあることに俺は気づいていた。

（大丈夫だろ。少なくとも、俺らが1回戦で負けるなんてことはないはずだ。）

「よし。アウラ、頑張りましょか」

「おう。任せとけ」

しかし、試合の結果は思わぬ方向へと動いていったのだ。

そう、俺らのクラスはまさかの1回戦で負け。みんなが緊張でいつも通りの動きが出来なかったのだ。

そんな時だった。あいつが俺に話しかけてきたのは。俺も運動部だ。勝負事に負ける方がいるのもわかっている。

そして、みんなは泣いている。しかし、俺にはどうしても涙が出るほどの悔しさが無い。

そんなことを思っているうちに俺は体育館裏の階段で一人考えことをしていた。そして、俺に1人近づいてくるやつがいた。

（やはり、俺は何も感じない人間じゃないのか悲しみや喜びの感情が不足しているんじゃないのか）

「美崎君は泣かないんですね」

（ん？誰だ。こんな気持ちブルーの時に話しかけてきて。）

「よ。浦城。俺だって悔しくないわけじゃないんだ」

「ただ、出てこないんだよ」

「私はそうは思わないです。美崎君は人より感情の表現が苦手なだけですよ」

（急にそんなこと言われても、俺だってどう、対応したらいいのか分からねえよ。）

「そういうものなのか」

「だって、そうでしょう。あんなに優しいあなたに心がないなんて」

「何で俺が優しいなんてわかるんだよ」

「私、前にあなたを電車で見かけたことがあるの。その時のあなたの行動が忘れられないのよ。」

「いつのことだ。全然、思い出せない。」

「2人の老夫婦が電車に乗ってきてきてその時あなたは席を譲って隣にいた人も席を立たせていたじゃない」

「そんなこともあったのか。よく、覚えていないんだよ。昔のことは」

「今時、そんなことする人は少ないわ」

「って、言われてもなあ」

「結局、お前はここに何しに来たんだ？」

「・・・」

俺がそのセリフを言った途端、浦城は目を押さえながら黙って体育館の方に走って行ってしまった。

（あいつは何がしたかったんだ。俺は心のなかでそうつぶやくのであった。）

「いた。アウラ」

「ん？どうした。聖人。」

「まだ、俺らにもチャンスがあるんだよ」

「負けたのに？」

「敗者復活の枠が決勝のトーナメントのところにあっただよ。」

「ってことはだ。アウラ。予選が終わった後に敗者復活戦をやるってことなんだよな？」

「たぶん、そうだろうな。」

「これでまだ望みが繋がった」

「今度こそ勝とうな。アウラ」

「ああ」

俺は敗者復活戦が始まるまで1人で色々な競技を見て回った。外は男子のサッカー。女子のドッチボール。中では男女のバレーとバスケ。必然的に中の競技の方が時間がかかる。

俺は浦城のことが気になったのである。俺のあの言葉でなぜ浦城が黙って行ってしまったのか。そう考えているうちに俺の足は体育館へと進んでいた。

「キヤー。麻美。そこよ〜決めて〜」「頑張れ浦城」「キヤー浦城先輩。」

などという浦城へ応援やら何やらが混じっていた。

「相変わらず、あいつは人気だな」

「そうだな。浦城は人気だ」

「おう。聖人。いきなり、出てくるなよ」

「だって、私〜アウラ先輩を見かけて〜急いでこっちまで見に来たんですよ。」

「おい。聖人。気持ち悪いから女子の真似なんかするな」

「いや、アウラが元気ないなと思ってさ」

「それにちよつと聞きたいこともあつたしさ。」

「聞きたいこと?」

「ああ。さつき体育館裏で浦城と何をしゃべっていたのになつてさ?」

「俺もよくわからん。」

なので、俺はそこであつたことを聖人に話してみた。

「それって浦城がアウラを心配してきたんじゃないかねえのか?」

「何で浦城が俺を心配なんてするんだよ」

「ふう〜。分かってねえな。浦城はお前に気があるんだよ」

「聖人こそわかってねえよ。俺と浦城があるわけねえよ」

しかし、そう言われる不思議なもので今までそんなに気にならなかつた浦城が急に気になりだした。

「あらあら、アウラちゃん。浦城のことを気になりだしちゃった感じですか?」

(相変わらず、良いタイミングで声掛けてくるな。本当にサトラレ気分だ。)

そうこうしているうちに俺らの敗者復活戦が始まった。結果は見事に俺らが勝ち上がったのだ。

(うれしいはずなのに俺の頭の片隅でひっかかって取れないモヤモヤが未だに存在していることに俺は気がついた。)

しかし、この後の出来事でそれはすべて解決へと向かうのであった。

「美崎君。ちよつと良い？」

俺らが、決勝トーナメントに出場が決まり、盛り上がっているところに浦城が話しかけてきたのだ。

「わりい。ちよつと行ってくらあ」

「おお。なんだ。なんだ」「アツいね」「あの2人ってまさか」

などという声が聞こえてくるが浦城にはそんなことお構いなしで歩いて行く。

そして、俺は浦城が行く方に着いて行った。

(浦城のやつどこに行く気なんだ?)

この道は屋上にしか続いていないはずの道をひたすら上がっていく浦城。そして、それを追う俺。

そして、屋上に着くと浦城はしゃべりだした。

第5話 予選と感情（後書き）

どうも、作者の新咲美羽です。

球技大会のところ長いですね。まだ予選です。そして、今回は決勝という形になると思います。

しかし、決勝の前にまさかの浦城からの呼び出し。アウラはどうなるのか？
楽しみです。

第6話 決勝前の謎

俺は屋上に来ている。

なぜ、屋上かと言うと、体育館で浦城（うらむら）に呼ばれたからだ。

浦城についていった結果が屋上だったというわけなのである。屋上。俺。浦城。これが今の俺の現状だ。

そして、聖人（せいじん）が変なことをいったから浦城を変に意識してしまっている俺がいた。

（浦城が俺のことを好きだっていうのか。そんなバカな。あるわけない。）

そんなことを思っていた俺だが、心のどこかでは期待をしていたのかもしれない。

そして、さっきは気付かなかったけれど、今日は風があつて気持ちいい。

日光は暑いんだけどな。それにこの光景は言葉では表せられないな。俺の視線の先に浦城の後姿、そして、眩しい太陽。なびく風。

そんな光景につい、浦城に見とれてしまった。

「ねえ。美崎君？何であんなこと言ったの？」

「はあ。何がだ？」

そして、浦城はこちらを向いた。

振り向いて近づいて来る。

(えっ。ちよっ。近付き…だぞ。)

パーン。乾いた音が屋上に響き渡った。

「えっ？えっ？えっ？」

俺はわけがわからずテンパってしまった。

なぜ、俺が叩かれたのか。聖人の情報はなんだったのか？
それが、俺の頭の中を駆け巡った。

そして、浦城は何も言わずに去っていったのだ。

「ちよっと待てよ。どういふことか説明しろよ」

しかし、浦城は振り返って悲しい表情を浮かべた。

浦城の行動はそれだけだったのだ。

(なんだ？あいつが怒っている理由がわからない俺が悪いのか。)

(誰か教えてくれ。)

そう、俺は心の中で叫んだ。

そうして、俺はここにいてもしょうがないと思い、体育館に戻ることにした。

そして、体育館で俺の想像通りのことが待っているのであった。

体育館では聖人が俺の帰りを待っていて、俺が帰ってくるとニヤニヤしながら聞いてきたのだ。

「アウラ。浦城は何だつて？つて、お前どうしたその顔？」

そう、浦城にビンダされたところが真っ赤になっていたのである。

（あいつ、完全に手加減しなかっただろ。）

俺はそう、思いながらも聖人と話していた。

「ん？浦城にビンタされた」

「聖人が行く前にあんなこと言うからちよつと期待しちまったじゃねえか」

「いや〜。俺はてつきりそういうことなのかと思ったんだけどな」

「むしろ、俺なんてわけが分からない状態だぞ。ビンタはされるわ。浦城は何も言わずに屋上から出ていくわ」

「アウラ。しつかり、浦城に何で殴ったのか、聞いた方がいいんじゃないのか？」

「それには考えがある。この球技大会が終わったら、はつきりさせてやる」

「とりあえず、今は球技大会の決勝を集中しないと浦城問題も解決は出来ないし」

「アウラは何か策があるのか」

「すべては決勝リーグで勝って、勝って、勝ちまくれば答えは出る」

「何かあれば言ってくれ。俺も協力する。何か俺の勘違いからなっちゃった感じだしな」

（ん）。そうだな。聖人にも協力して、もらうかな。（

「ああ。頼むわ」

「でも、聖人。決勝の前に腹ごしらえはしとかないとな。」

「賛成。今日は購買で買っていこうぜ」

「そうだな。俺は焼きうどんでも食おうかな」

「アウラいいな。焼きうどん」

「聖人も買えばいいんじゃないか」

「ですよねえ」

そう言う俺たちは人が群がる購買へと足を進めた。
そこをみると、完全に人が群がっている。

(うわあ。買える気がしねえ。)

しかし、聖人のやつを見るとあいつはいつの間にか購買のおばちゃんの前まで進んでいる。

(聖人のやつ。どうやって、あそこまで行ったんだよ。しかも、もう、帰って来てるし。)

「じゃ。アウラ。あっちのベンチで食おうぜ。ってまだ、買ってないのかよ。遅いよ。」

「お前が早過ぎなんだよ。俺も行ってくるわ」

「しかし、俺がおばちゃんのとこまで行くには苦労をした」

俺がおばちゃんの前に行くところに残っているのは売れ残ったパンや人気のない商品がならんでいた。

「おばちゃん。それとそれ頂戴。」

「あいよ。380円ね」

「聖人。行くぞ」

俺らは昼食を食いながら次の決勝について色々話し合っていた。

そして、俺は浦城問題も解決する具体案を考えていた。

何個かはプランがあるのだが、上手くないかもしれないのでいくつかプランの用意が必要なのだ。

ついに昼食が終わり。決勝の舞台に上がる時がきたようだ。

俺達のクラスのバレー出場者は戦場という名の体育館へ赴いた（おもむいた）のである。

「よし。みんな行くか。」

そう。聖人が言うところみんなは気合いの入った声で返事をした。

「よっしゃ〜。」「やってやるぜ。」「おう。」

決勝リーグの初戦のブザーが今、鳴った。

第6話 決勝前の謎（後書き）

すみません。毎日、更新しようと思ったのですがうまくいかなかった。前回のあとがきでは次は決勝です。みたいなことをいったのですがまだ、決勝に入っていません。

決勝前の浦城とアウラのひと悶着書いてみました。

次こそ、決勝。そして、浦城問題は解決するのか？
ぜひ、見てみてください。

あと、皆さんも気が向いたら。評価でもしてみてください、私の書いたのはどのように評価されているのか。
気になっちゃいます。

第7話 全ての決着

決勝リーグともなると応援の数も違い、体育館がまるで地鳴りのような感覚に襲われる。と俺は感じていた。

決勝リーグの大歓声の中、俺はこの後のことで頭がいっぱいになっていた。今、思うとあの時は何も考えてはいなかったのかもしい。

そんな中、始まった決勝リーグ。俺らのクラスは順調に勝ち星を増やしていくのであった。俺はとあることに気がついたのであった。

（あいつとの約束って順位で勝負とか言ってたか？もし、同じ順位だったらどうする気なんだ。）

（とにかく俺は優勝しないと話が進まないし。久々に全力で運動してやるか。）

俺は久々に全力で運動することになった俺は自分で言うのもあれだが凄かったのだ。

そうしているうちに決勝リーグはついに勝ち星が同じ同士の戦いになるのであった。

「では、決勝リーグの最後の試合は10分後から開始いたします」
係りの女がそう言った。

「アウラ。ちょっと、飲み物でも飲みに行こうぜ」

「ああ。じゃ〜自販機でいいな」

俺と聖人は自販機へと歩いていくのであった。体育館の裏口の階段から俺たちは降りていた。

「ってか、今日のアウラなんかヤバいな。部活でも見せたことないくらい動きが凄いなだけだよ。」

「そうか。聖人の勘違いだろ。いつもと同じにしか動いてないさ」

ジュースを飲みながら聖人は俺へ聞いてきた。

「んで、アウラ。もう、決勝リーグも終わりだし浦城問題の解決方法は決まったのか？」

「ああ。作戦Aに決まった」

「作戦A？なんだ。それ？ま、何か手伝うことがあったら・・・。」

「わかったって。何度も言わなくてもちゃんと聖人の手が必要だったら手伝ってもらうからさ。」

そう。言い終わると俺らはあの体育館に戻るのであった。灼熱じわくやせしと大音量の木の箱の中へ。

「さあ。注目の男子バレーボールの決勝リーグ。この1戦は目が離せませんね。この1戦で優勝が決まってしまうといっても過言ではないでしょう」

（はあ？あの解説何を言ってるんだあ？過言じゃなくて、確定だろう

があ。
)

ま、俺はそう心の中で思ったが口には出すことはなかった。

それもそのはず、決勝リーグは4クラスで行っている。そして、俺らのクラスと相手のクラス共に2戦2勝なのだから。

必ず、どっちかが3戦全勝となるのだから間違いない。

そして、試合時間は20分と長かったが決着はついたのであった。

決勝リーグは見事うちにクラスが優勝した。デュースまでもつれ込み。俺のスパイクが2連チャンで決まったのだ。

(ふう。久々に全力でやると疲れるんだよな。ま、これで俺の作戦Aの半分近くは成功だ。)

女子のバレーボールの決勝リーグも決まり万能女こと浦城のクラスは準優勝という結果に終わった。

(よし。これで俺の作戦Aは半分成功だ。)

他の競技も決着がついた。そして、時間は15時をまわったところで各競技の授賞式が行われた。

「いやあ〜。今日は疲れたな。アウラ？」

「ああ。確かに疲れた。こんなに疲れたのは久々だ」

「アウラ。この後の予定は？」

「大事な1戦がまだ、あるんだな。」

「あれか。頑張れよ。」

聖人は俺の大事な1戦という言葉で何かわかったようだ。

「しつかり、解決してくるから問題ない」

「その戦いが終わったらどうなったのか聞かせるよ」

「ああ」

俺はそう、聖人に告げると浦城のクラスへと向かった。
この球技大会で俺の最後の戦いが今、始まる。

浦城のクラスの前に俺は立っている。そこで俺は浦城のやつを探す
ことにしたのだ。

(あれ？浦城のやつがどこにもいない。じゃ〜誰か知り合いでも。
おっ。あいつは。)

「すみません。ちょっと浦城のこと探してんだけどどこにいるか知りませんか?」

俺が訪ねたのは球技大会前日に浦城の隣にいた。聖人が可愛いと言っていた女だった。

(名前は確か……。篠田とか篠本、いや篠原とかたしか篠なんとかだった気がするんだが。)

「ああ。美崎君。麻美あさみならさつき、屋上の方に上がって行ったわよ」

「麻美????ん?誰だ?」

「だから、浦城よ。浦城。浦城うらむらみ麻美よ。」

「あいつ、麻美っていう名前だったのかあ。」

「美崎君口から言葉が漏れてるわよ」

「やべ。悪い。」

「何で私に謝るのよ。謝る相手が違うのよ。」

「あと、美崎君。秘密とかを簡単に人に話すのはどうかと思っぞ。」

「って、そんなこと言われても俺は浦城の秘密なんて知らないぞ」

「勝負に勝ったらお互いの言うこと何でも聞くっていう約束したんじゃないの?」

「そうなのか？」

(浦城は賭け(かけ)の内容言う前に走っていたからな。)

「俺はただ、浦城に勝負しましょう。って、言われたただけだぞ」

「麻美のやつ。また、勘違いしたな。ちょっと待って、麻美に伝えるから」

「いや、気にするな。俺が直接伝えるからいい」

「ホントに。あの子、すぐ勘違いするのよ。じゃ〜美崎君から伝えてもらっていいかしら。」

「ああ。伝えておくわ」

俺はその篠なんとかにそう言つと、急いで屋上に向かった。

「ガチャ」

俺は屋上のドアを開けて柵の近くにいる浦城に気がついた。何かぼんやりと空を見上げているようだ。

(浦城は俺に気づいていない。)

俺は浦城の近くまでより、浦城に声をかけた。

「おい。こんなところで何してんだ。」

「あつ。美崎君。別になんだっていいじゃない」

そういうと浦城は俺の横を通り屋上から出ようとした。そして、出ようとする浦城の腕を俺は掴んだ。

「ちょっと待てよ。どうして、逃げるんだよ。」

「それにお前に聞かなきゃいけないことがあるのによお。」

「何よ。聞かなきゃいけないことって。」

「俺たちは賭けをしていたよな。俺はまだ、お前から賭けに勝ったときの話聞いてないんだけど」

「えつ。美崎君。知らなかったの？」

浦城はとても驚いている。そして、逃げようとする素振りもなくなつたので俺は手を離れた。

「ああ。知らない。」

「だって、体育館でお友達と騒いでいたじゃない。」

「あれは単純に決勝リーグに出場が決まって騒いでいただけだ」

「じゃ〜全部私の勘違いだったの？」

「そういつことになるな。」

「ごめんなさい」

「ああ。いいよ。誤解も解けたみたいだしな」

「そうじゃなくて、ここで美崎君を叩いたことよ」

「あの時、お前。結構本気でビンタしたろ」

「だって、裏切られてと思って。つい、本気で」

「ホントにすまないと思っているか」

「思っています。」

「じゃ〜何でも言うこと聞くな？」

「はい。・・・えっ？」

驚いた表情で浦城は俺を見つめた。

「え？ 許してくれたんじゃないの？」

「ああ。ただで許したんじゃ、浦城も心が痛むだろ。」

「それはそうだけども。」

そして、俺は考えているふりをした。そして、思いついたように浦

城に要求をいった。

「じゃ〜今回の一件はなかったことにする。だから、浦城も今回のことを忘れてくれ。」

そう。これが俺の要求だったのだ。むしろ、俺は勝負に勝っても何も要求するつもりはなかったのだ。だいたい前から人に何かを求めるのはやめにしたのだ。

そして、俺は浦城に感謝の言葉を言われた。

「ありがとう。」

「ま、また何かあったら言ってくれ。」

俺はそう言うと、屋上を出ていったのであった。

「ガチャ」

「ドターン」

そして、屋上のドアは閉まった。

「あの〜美崎君。」

またもタイミング悪く浦城は俺に話しかけ、浦城の声は俺に届かなかったのである。

第7話 全ての決着（後書き）

皆さん今日もあついですね〜。

そして、眩しい。

ついに球技大会編が終わりましたね。

アウラが浦城を許してしまったという。他にももつと色々な要求があると思っんですけどね。w

次はどんな話になるんでしょう。

みなさんも期待しててください。

あと、よかったらコメントや評価の方をお願いします。

第8話 中間テスト突入

嵐のような1日が終わった。昨日は色々な体験をした。球技大会でのアツい戦い。異性に初めてビンタされたこと。とくかく、たくさんの方があったのだ。

そして、俺はいつも通り自転車をこぎながら高校へと向かっている。「キキッー。」

いつも通りのことはここにもあった。ブレーキの利かない俺の自転車。後ろを振り向くとそこには聖人まことがいる。

「よっ。アウラ。昨日はどうだった」

（やはりな。いつも通りの展開だな。）

「おはようさん」

「で。どうだったんだよ」

「見事に浦城問題うらぎは解決した。結局は浦城の勘違いという形だったけどな」

聖人は嬉しそうな顔をしながら、俺のことを見ていた。

「それだけか？昨日会った出来事は？」

「だいたいそんな感じだったな」

聖人は急に驚いた表情に変わった。そして、すぐさま俺に聞き返してきたのだ。

「えっ。アウラ。何もなかったのかよ。俺はてっきりそういう流れになっていると思っただのに」

「そういう流れってなんだよ」

聖人は呆れたように深いため息をしている。

（聖人のやつ何がしたいのかさっぱりだな。よくわからん。）

「相変わらずだな。アウラ。無関心。無愛想。鈍感。顔をいいのにモテないのはそういうところが原因だな。きつと」

「別にそんなことはどうでもいい」

いつも通りの会話をしていると学校の予鈴がなり、俺たちは教室

にあわてて駆け込んだ。

「ガラー」

教室のドアが開くと同時におなじみの担任の顔が現れた。

（今日も1日学校が始まるのか。退屈なんだよな。何か面白いことでも起きねえかな。）

「みんな。おはよう」

「おつ。お前ら退屈そうな顔しているぞ。そんなお前らに良い情報だ」

俺は担任の大島の話聞いて、かなり期待に胸をふくらませてドキドキしていた。しかし、そのドキドキも一瞬でぶち壊される結果になるのだった。

「来週から中間だぞ。しつかり勉強しておくように。以上」

（はぁ。どこが良い情報なんだよ。ただの中間のお知らせじゃねえかよ。）

「中間かよ。だりいー。大島のやつ。なんて情報くれるんだよ」

「おい。美崎。そういうことはしつかり口に出さないで心で言え。それと先生を呼び捨てにするのはどうかと思うぞ。」

クラスのやつらは大爆笑。俺も心が緩んでいた。確実に俺は冷や汗をかいていることだろう。間違いない。

「アウラ。どんまい。後で呼び出しくらうぞ。」

笑いながら聖人が俺に話しかけてきた。俺の周りのやつも笑いながらドンマイと話しかけてきている。

（やつちまったな。後で呼び出し確定か）

「今日のHRはここまでする。美崎。わかってるな？職員室まで来い」

俺は久々に職員室に来た。基本的には全く用がない場所だからである。

「美崎。思っけていても声に出すな。俺はお前が嫌いじゃない。實際やることはちゃんとやっけている」

「ありがとうございます。以後は気をつけるように心がけます」

「まあ。今日はこの辺で許してやるよ。初犯だしな。次は許さんぞ」大島先生がそう言い終わると俺は職員室から廊下へと出ることになつた。再び、万能女をここで見るようになった。

「あら、美崎君。職員室になんのご用だつたのかしら」

（ん？なんだ。こいつのしゃべり方。こんなお嬢様口調だつたか？）

「何ですの？こいつ、急にお嬢様口調みたいなことして。みたいな顔は。」

（やはり、こいつ。読心術の使い手か。って、違うな。たまたまだ。）

「お前。バカか」

「ちよつと、お前つて失礼じゃないの？美崎君。」

「なんだ。ちゃんとしゃべれるんじゃないか。」

「昨日のことがあつたから、美崎君にどう接していいか分からなかつたのよ。」

「だから、お嬢様口調になるのかよ。やっぱ、すごい人つてのは、変わつてるもんなんだな」

「何よ。その言い方。美崎君て失礼だよな」

「浦城。職員室に何か用事があるんじゃないやなかつたのか？」

浦城は何かを思い出したような顔をした。しかし、浦城は表情がよく、変わるやつだな。ころころとたいしたもんだ。

「ごめんね。美崎君。私、部活の事でちよつと呼ばれてるの」

「おう。またな」

「……。」

「あつ。そつだ。美崎君？」

「つて、いつも美崎君いなくなっちゃうんだから。」

俺は浦城が言葉をかける前にすでに立ち去っており、浦城はいつもタイミングを外す。

そして、俺は教室に入り席に着いた。後ろから聖人が話しかけてきたのだ。

「アウラ。どうだった？ずいぶん長いお説教みたいだったけど」

「大島の説教自体は短かった」

「んじゃ、何が長かったんだ？」

「ん〜。あえて挙げるとするなら浦城との会話だな」

「へえ〜ずいぶんの仲のよろしいことで」

聖人はこの手の話をする時はいつもニヤニヤしているな。

「そんなことより、聖人。今日からテスト期間で部活ないだろ」

「ああ。たしかにないな。」

「じゃ〜俺に図書室で勉強を教えてくださいよ」

「OK。」

俺は聖人と放課後の勉強会の約束をとりつけた。

「ガラー」

「失礼しま〜す」「失礼します」

俺と聖人は図書室で椅子に座って、勉強道具を机の上に置いた。

「じゃ〜アウラ。何から勉強するんだ。数学か？英語？それとも、古文？漢文？」

「じゃ、数学から頼む」

俺達は勉強を始めようとした。その時。図書室のドアが開いた。

「ガラー」

「失礼します」「失礼します」

2人の見覚えのある顔がドアから入ってきたのであった。

「あつ。」「あつ。」「

俺と浦城はお互いの顔を見て声をあげた。

「どうした。アウラ。あれ〜。浦城つひきあさみ麻美さんと篠本しのもとみどり美琴さんじゃないですか」

「2人とも勉強ですか？」

「はい」「そうです」

「じゃ、一緒にやりませんか？みんなでやった方がはかどると思うし」

俺達は聖人の提案で4人で勉強することになった。

第8話 中間テスト突入（後書き）

どうも毎日お久しぶりです。
新咲美羽です。

私の作品で会話中心になっちゃってますね。

でも、そんな私の作品を読んでくれる皆さんいつもありがとうございます。
ざいます。

毎日、更新の方させてもらいますのでこれからもよろしく、お願いします。

評価や感想も気が向いたらお願いします。

第9話 巡り合わせと図書室と

今、俺は図書室という俺が最もかわらないであろう教室にいる。なぜ、こんなところに？それは簡単だ。来週から始まるテストのために聖人に勉強を教えてもらうために決まっている。

しかし、メンバーは2人ではなく4人ということになっている。

「いやあ〜。こんな偶然みたいなきことがあるんだね」

そう、聖人は少し驚いたような感じで話していた。

俺はというと、ついこないだまで女子としゃべったことなどなかったのだ。こんな展開になるなど想像すらしていなかった。

「ホントだね。まさか、中島君なかじまと美崎君みさきがいるなんてね」

つと、篠本しのもとが話している。

(篠本しのもとってこういう声なんだ。)

俺は篠本と話したことはなかったため、声などは知らないのだった。

「っていつか、篠本さん。俺のこと中島じゃなくて聖人せいじんって読んでくれていいよ。あんまり、かたっ苦しいのは好きじゃないんだ」

聖人はいつもの調子でそういつている。実際、聖人を名字で呼ぶやつは少ない。

「そお？じゃ、聖人君せいじんって呼ばしてもらおう。あたしのことも美琴みことって呼んで」

「了解」

俺はそんな二人のやりとりを見ている。そして、チラッと時計を見た。んで、また前を見てみると浦城うらむらと視線があった。

2人は一瞬で視線をそらす。こういうとき俺はどういう風に接しているのかわからない。こんなことはしょっちゅうあるのだ。

「アウラは美琴ちゃんと初対面だろ。何か話せよ」

(つて、おいおい。急にふられても心の準備が・・・。)
「どうも」

やはり、こんな回答しかできないわけで、俺はそんなに器用じゃねえんだよ。聖人。

「ごめん。美琴ちゃん。こいつ、人見知り激しくて」

(初めてでそんなに話せるかよ。)

俺は当然のように無理だった。そして、俺は再び時間を見る。もう、2人に会ってから20分はたっているのであった。

「初対面だししょうがないよ。こちらこそよろしく。美崎君」

(おお。なんて優しいんだ。ま、優しいけど俺とこの人との関係は今日限りだろうけどな。)

「ねえ。美琴と中島君。テスト勉強しないの？」

ちよっと、ムツとした顔で浦城が言った。

(そうだな。万能女。俺もちよどそう、思っていたところだ。)

「悪い浦城さん。じゃ、始めようか。2人は何の勉強をしにここに来たの？」

聖人は2人を見ながらそう尋ねた。2人は同時に答えたのであった。

「古文かな」「英語よ」

(うわ)。この2人見事にかみ合っていないな。篠本が古文で浦城が英語か)

「なるほど、バラバラの教科か。2人はどうやって勉強しようとしていたの？」

相変わらず、スムーズな流れで聖人は2人と会話している。俺はというと完全に観客の気分だ。

「分かる方がわからない方を教えるに決まってるじゃない」

そして、相変わらずなやつがもう1人。浦城は高圧的なしゃべり方をする。しかし、聖人は見事な返しですらりとかわす。

「そうだな。そういうやり方になるな」

「じゃ〜2人の勉強も俺がみようか？」

（聖人は面倒見もいいな。俺はかわりたくもないし、のちのち、めんどくさそうだ。）

「いつちゃ、悪いんだけど中島君って、頭いいの？これでも私、学年で20番にはいつも入っているんだけど」

（よく、ここまで攻撃的な性格になるもんだ。むしろ、こっちの攻撃的な性格が本来の姿か）

「そうだな。クラスでは1位だし。学年では一桁台かな」

聖人はやんわりとそう答えた。俺はすぐさま浦城の方を見たが尊敬のまなざしに変わっていた。素直なところもすっかりと存在しているようだ。

「すごいね。聖人君。学年で一桁かあ〜。私はとったことないなあ」。

篠本も感心した風で話していた。

「美琴。何、言ってるのよ？あんだだっで学年で10番台なんだからあと少しで一桁じゃない」

（えっ。篠本も頭いいのか。この2人頭もよくて顔もいい。すばらしいな。）

そして、俺は視線を感じる方に顔をあげた。間違いない浦城が俺を見ている。何か言いたそうな顔で。

「ねえ。美崎君は何番なの？」

（やはり、その質問がきたか。ま、流れる的に来るとは思っていた。）
「学年で70番台だよ」

浦城は軽くバカにしたような感じの顔になり、こう、言った。

「学年で70番台ね〜」
（こいつ完全に見下したな。見下されようが関係ないのだが。さすがに多少はイラっとくる）

「お前だっで、前の日まで遊んだり、漫画を読んだりしなきゃ、も

つと成績いいだろ。」

聖人はそう言ったが俺はそこには全く賛成できない。テスト前は勉強しない方が楽。

「ん？だつて、めんどくさいだろ。勉強するの。」

「えっ。美崎君つてテスト勉強してないの？」
つと、驚いたように篠本が言ってきた。

（そんな、驚かれてもやりたくないものはやりたくないし。）

「ああ。してない」

俺は無愛想にそう答えた。

「じゃ、今日は何で勉強なんてしてるのよ。」

（なんで、こいつは怒ったような声で言ってくるんだ？）

「あえていうなら、気が向いたからだな」

3人ともため息をした。

（みんなため息つて。こいつらさつきから何なんだ？）

「アウラももつと勉強すればリアルに学年1位とか狙えるんじゃないのか」

「別に学年1位とか興味ないし。赤点さえとらなければいい」

俺はそう言い終わり、時計を見ると下校時刻の時間になっていた。

「そろそろ。帰ろうぜ」

俺はそうみんなに提案した。すると聖人がみんなにさらに提案する。

「明日も勉強会らないか？」

「賛成。」「そうね。」「・・・。」

「アウラ？」

「ああ。」

篠本は元気よく賛成の声を上げた。浦城はしぶしぶ参加する様子。俺はというと、全く参加したくはなかったが空気を読んで参加を表明した。

第9話 巡り合わせと図書室と（後書き）

ついに第9話までできましたね!!!

今後、アウラ君どうなるのでしょうか？

でも、そんな私の作品を読んでくれる皆さんいつもありがとうございます。
ざいます。

毎日、更新の方させてもらいますのでこれからもよろしく、お願いします。

評価や感想も気が向いたらお願いします。

第10話 図書室×男女「戦い

俺はまたここに来てしまっている。どこかって？それは高校という誰もが行くであろう勉強するところだ。

夏が近いせいか日差しが強い。俺の変わらない日常がまた今日も始まるのだ。

「キーンコーンカーンコーン」
いつものように予鈴がなる。

（ん？いつものように？っておい、予鈴がなったのに下駄箱にすらついてない俺は・・・）

こそつと後の扉から入った俺だった。俺が簡単に担任に気付かれるのであった。

「ほ〜う。美崎^{みつき}。だいぶ遅い登校だな」

（ドキッ。）

「いや、ちよつと寝坊していしまして」

「まあ。今日は許してやるか。お前が遅刻するなんてめずらしいことだしな」

（ふう〜助かった。今日は機嫌がいいらしいな。）

「ありがとうございます」

そう言い終わると俺は静かに席に着くことになった。そして、後の聖人^{まこと}に声をかけられる結果となる。

「どうしたんだ。アウラ？めずらしいな」
「ん？軽くボーっとしてたら遅くなった」
「アウラはまた、そんなことしてたのか」

聖人は小さな声で昨日のことを確認してくる。

「放課後のこと忘れてないだろうな？」

「ああ。大丈夫だろ」

「アウラに聞いているのに大丈夫だろって答え方はおかしいだろ」
「ああ。そうだな。忘れてないから大丈夫だ」

聖人と朝の会話をしている間に朝のHRは終わることとなった。

「では、これでHRは終了とする」

俺はいつものように生活し、午前の授業をこなし、昼食を食べ、午後の授業が終わった。そして、放課後へと時は流れるのであった。

（また、あの図書室へ行かなきゃいけないのか。昨日は勉強の気分だったが今日はそうでもないな。）

「ガラッー」

嬉しそうに篠本しのもとが俺を見てしゃべりかけてくる。

「やっと、アウラ君、来てくれた。みんなで待ってたんだよ」

篠本が話し終わると聖人もしゃべりだした。

「俺は早く始めちゃおうって言ったんだけど2人がみんな揃ってか
らって、言うからさ」

「聖人。篠本。浦城^{ほりむら}。遅くなつてすまない」

俺はみんなを見ながら遅れたことを詫びた。そして、俺の言葉の後、
すぐに浦城が勉強会を促した。

「ねえ。早くやらないの」

俺はその声を聞きながら席に座った。その後は勉強会が始まった
のだ。

(ん？浦城に何か違和感が……。何だ？あつ。わかった。)

「浦城。お前、髪を切つてねえか？」

みんなが俺に見た。もちろん、浦城のやつも俺に向いた。そして、
口を開くのであつた。

「おおゝさすがだな。アウラ。よくぞ、気がついた」

「ねっ。さすがだね」

(何で反応するのが本人じゃなくてこいつらなんだ)

「俺は全く気が付かなかつたわけだ。それでアウラは気がつくのか
なつて、みんなに聞いたら黙ってみようつてことになつたんだよ」

(そういうことか。)

俺は心でそう思ったが口には出さなかつた。

「ねえ。麻美も何かいいなよ。せつかく気がついてくれたのに」
「ありがとう」

軽く照れたように浦城はそう言った。

（最初に感じたこいつが怒った様な気がしてたのは俺が髪にすぐ気がつかなかったからか）

「じゃ〜一段落したところで勉強会を始めましょう」

聖人は元気よく提案し、篠本も元気に賛成の声をあげ、浦城の表情も先ほどよりは柔らかくなっていた。

1時間後……。

（まったく集中できねえ〜。）

普段、勉強慣れしていない俺は簡単に集中力が途切れてしまうのであった。俺はきよろきよろしていた。

そんなとき浦城のやつが俺に話を持ちかけてくるのであった。

「ねえ。美崎君？また、私と勝負しない？」

沈黙をやぶり、浦城がそう言った。

（勝負か〜めんどいな〜）

「何でまた勝負なんだよ。勉強は勝負するもんじゃないだろ」

俺は勝負したくないため、そう言ったが浦城はどうしても勝負した

いらしく、断固として譲らなかつた。

「だって、さつきから美崎君。全然、集中してないじゃない」

「そうは言っても俺と浦城とは50番近く離れてるのに相手になるわけないだろう」

「ダメ。絶対勝負だからね。負けたら勝った方の言うことを何でも聞くことで」

(こいつ、俺の話をごちで無視しやがった。)

「しょうがないから、うけてやるよ」

浦城のやつは急に笑顔になり、俺を見てうれしそうにしている。

(そんなに勝負に勝ちたいのかね。)

俺はその勝負が決まっても別に集中力が上がるわけではなかつた。

「アウラ。お前、さつきから勉強してないけどいいの？浦城に負けちまうぞ」

全く勉強してない俺に聖人は声をかけてきた。しかし、俺の答えは決まっていた。

「別に勝ち負けなんてどうでもいいしな」

「出た〜。無関心。もうちょっと興味もとうぜ」

「いいよ。中島君。なかしま私が美崎君に興味という単語を教えてあげるから」

浦城はそうじゃべると笑っていた。

(こいつ何なんだ？相変わらず、よくわからねえな)

「いいな。いいな。2人とも。私も混ぜりたいなあ」

篠本はそう言うらやましそうにいった。

「じゃ、俺と変わって浦城と勝負してくれよ」

しかし、篠本の答えはNOだった。

「そんなことしたら、私、麻美に殺されちゃうもん。」

「別に美琴のこと殺しなんてしないわよ。」

しかし、浦城の眼は笑っていないかった。

(こいつ、本当に殺すんじゃないか?)

結局、俺は浦城と中間テスト対決をやることになってしまった。

第10話 図書室×男女Ⅱ戦い（後書き）

前日は休んでしまい、もうしわけないです。

そんなこんなもありましたが、ただいま第10話に突入しました。

でも、そんな私の作品を読んでくれる皆さんいつもありがとうございます。
ざいます。

更新の方させてもらいますのでこれからもよろしく、お願いします。

評価や感想も気が向いたらお願いします。

第11話 戦い再来！！

今日はテストの初日。俺は空を見上げながらため息をついていた。俺がなぜ、このため息をつかなければいけないかと言うところある女との闘いが再び迫っているからだ。

「ふう〜。ついに始まってしまったか。この日が。だるいな」

「よっ。アウラ。今日からのテストだな。いろんな意味で頑張れよ」

聖人はせいじん良い笑顔で俺を出迎えた。

そう、励ましてきたこの男は元を正せばこいつのせいなので戦いになったんじゃないかと思つた時もあったが、それはやめた。なんか、人のせいにするのは心がすつきりしないからだ。

「とりあえず、がんばってみるわ」

「おう。ガンバ。っで、勉強はしたのか？」

「いや、していない。なぜだ？」

「はあ〜。アウラ〜。何でこんな日も勉強してこないんだよ。」

「だって、そう簡単に俺のリズムは変わらないだろう」

聖人は俺の回答を聞いてやれやれといった表情をしている。対して俺は満足そうな顔をしているのであった。

「話をしてもらちがあかないから、とつとと教室に行くぞ。聖

人。」

俺と聖人は教室に向かった。そこで篠本しのもとと出会うのであった。

「2人とも今日も仲良いね」

「おう。大体は聖人と一緒に行動してるけどな」

篠本はそれを聞くと嬉しそうに俺たちを見てきた。そして、何かを思い出した感じの雰囲気を出して俺に聞いてきた。

「アウラ君、どんな感じ？」

「何がだ？」

「何がだ。じゃなくて、今日のテストのことよ。ちゃんとした？」

この会話に入ってきたのはもちろんこの男。聖人だった。

「それが聞いくれよ。美琴ちゃん。こいつ勉強してないんだとさ。」

「ええ〜。それで大丈夫なの？」

もちろん、篠本は不思議そうな顔をしている。俺は自信満々な顔でその問いに答えた。

「ああ。もちろん、大丈夫だ」

聖人は篠本と顔を合わせて2人のため息をついている。そんな2人に俺は時間を気にさせた。

「いいのか？2人とも。」

「何がだ？」「何がいいの？」

「ん、時間だよ。」

俺はそう答えると2人は勢いよく時間を見た。そして、何も言わずに全速力で走り出したのであった。

「ちよっ、お前ら」

俺は2人の後を追ったが完全に見失ったのであった。俺の朝はこんな感じで始まったのであった。

「みんな、今日から中間テストだ。頑張るように」

そう、担任の大島が話していた。俺はいつも通りにテストをするだけであった。

「では、開始。」

その声と同時にみんなが一齐に動き出した。俺はとうとういつもの自分のリズムで行うため遅れて答案用紙をひっくり返す。このときのみんなの顔を見てるのが好きなのだ。

「美崎。お前も早くテストを始めろ」

（んなこと言われなくても分かってるわ。時間だってあまるし。）

「はい」

俺はそう言つとテストを始めた。

30分後・・・

（やっぱり、余ったんじゃねえか。大島のやつ）

俺は心の中でそう思い^{まぶた}瞼を閉じることにした。

「んじゃ、みんな書くものをおけ。後ろから集めて前に持ってこい」

担任の大島がそうしゃべる声で俺は目覚めた。

（ん〜。テスト終わったのか。ああ。眠いな）

（今日のこの感じの出来だと70点はいったな）

心の中で俺はそんなことを考えながら後ろから取りにきた生徒に
答案用紙を渡した。

そんなこんなで今日の4教科分のテストが終わった。明日の3教科。全部で7教科のテストで中間は終了するのである。

次の日のテストも順調にこなした。そして、放課後。俺はこの勝負の発端となつた女に会おうのであった。

「美崎君。テストの出来はどうだったの？」

そう、聞いてきたのは学校で有名な女。万能女こと浦城麻美である。

「ああ。いつも通りだ」

「じゃ、私の勝ちね。いつも以上の出ごたえを感じているから。」

浦城は勝ち誇ったように言ってきた。そして、すぐさま確認をしてくるであった。

「負けた時の約束忘れてないでしょうね？」

「ああ。忘れてない」

「じゃ、言ってみて」

「・・・」

「・・・」

「ちょっと、しっかり忘れてるんじゃない。」

浦城はため息をつきながら負けた時の約束を言ってきた。

（なんで俺の周りにはため息がこんなに多いんだ？）

「負けた方は勝った方の言うことを1つ聞くのよ。わかった？」

「ああ。分かってる。いや、正確には思い出したが正しいか」

「そんなのはどっちでもいいわよ。とにかく忘れないでよね」

俺はそれを言われる浦城は俺のそばから離れて言った。

そして、こうして俺の中間テストの2日間は終わった。明日は中間のテストが返しが待っているのであった。

第11話 戦い再来!! (後書き)

今日は今日のぎりぎりに投稿ですね。

今日に間に合ってよかった。皆さんは今日はどうでしたか？

ただいま第11話に突入しました。

でも、そんな私の作品を読んでくれる皆さんいつもありがとうございます。
ざいます。

更新の方させてもらいますのでこれからもよろしく、お願いします。

評価や感想も気が向いたらお願いします。

第12話 結果・・・

昨日と一昨日は連チャンで大変だった。なぜかって？中間テストなるものがあつたからだよ。君。って、俺は誰に話をしているんだ。

「では、みんな席についたな。今日を楽しみにしていたやつ、していなかったやつもしっかりと答案を受け取るように」

（ふう〜。また、大島おおしまのやつは言ってるよ。みんな受け取るっての。）

などと俺は心の中で思った。もちろん、声には出していない。前回のてつは踏まない。

「アウラ。正直、緊張してる？負けたらどうしようとかさ、考えてるわけ？」

つと、聖人せいじんが話しかけてきた。

「いや、負けたら言うことを聞けばいいんだろ。勝った時のことは考えていないな」

俺はいつもの調子で聖人のやつに問いに答えた。

「おお〜。相変わらずですな。それは自信があると受け取っているかな？」

（自信とかって言う前に勝ち負けがどうしたんだ。はっきりいって

興味がない。つてのが、俺の率直の意見だがな)

なんて、心の中で思っていた。実際そうなのだからどうしようもない。俺は顔の表情を変えずに聖人に答えた。

「ああ。それでいい」

「おお。さすがですね。アウラ様。すごいです。50番の差を埋めるほどの出来だったのですね」

最近、影を潜めていた聖人の茶化しが始まったか。

「聖人。静かにした方がいいと思うぞ。もう答案返しが始まっているし」

「ヤベ」

聖人は焦ったように言っているが表情は全くと言っていいほど焦っている様子はない。そして、最初の答案は英語だった。

「美崎^{みい}、美崎、いるじゃないか、早く取りに來い」

「はい」

俺はテストの出来をみた。

(おお。英語は結構出来たと思ったけど、こんなに取れるとはな)

「アウラ。どうだった？」

「おう。90点ジャストだった。そういうお前は何点だった？」

「満点だ」

気持ちいいくらいの笑顔でそう言ってきた。こいつのこういふところは憎めないんだよな。変にすかしたりしないところがさ。

（俺の場合はすかしてるつもりはないが感情を表にすることはないからダメだな。）

「相変わらずというかすごいな」

「今回は結構、勉強したからな」

「確か、美琴ちゃんや浦城さん達のクラスも最初は英語だったな」

「そうなのか？んじゃ、聞きにいくとしようか」

「キーンコーンカーンコーン」

授業の終わりを知らせるチャイムが学校に鳴り響いた。

そして、俺と聖人はあいつらの教室に行こうとして、ドアの方を見るとすでにあいつらが来ていた。

（すでに来ていたか。そして、手にはしっかり紙を持って殴り込みか）

「どうだったのよ。美崎君」

「お前は？」

「私が聞いたんだからあなたからみせなさいよ」

「ほらよ」

俺はそういうと自分の答案用紙を浦城に見せた。表情がみるみるうちに悪くなっていた。

「何だよ。何で勉強しないでこの点数が取れるわけ」

「そんなこといったってな。お前は何点だったんだよ？」

「80点よ」

浦城は非常に悲しい表情をしている。しかし、俺はその表情に気が付きながらも話を進めた。

「ってことは英語は俺の勝ちで良いんだな？」

「でも、次は負けないから」

そう言い終わると浦城は俺の教室から出て行ってしまった。

「でも、美崎君って、すごいね。勉強しないで90点って。」

「美琴ちゃんは何点だった？」

聖人と篠本しのもとはなしをしている。和やかでいい雰囲気だ。

「90点だったよ」

「アウラと一緒に。やっぱり、アウラ。お前って凄いな」

「今回はお前たちの勉強見てたかたな。それでだよ」

「わりい。篠本。いちいち見せに来てたらきりがないから全教科帰ってきたら浦城に答案持って屋上にくるよつに言っておいてくれ。」

「わかった。そういう風に伝えておく。」

篠本は笑顔で引き受けてくれた。

(浦城だったらここで一言、言ってくるんだろっけどさ)

俺は屋上に来ている。そして、周りは誰もいない。

(ここはいいな。気持ちいい。風があつて。でも、落ち着くんだけな)

「いた」

俺はその声で振り返った。そこには浦城が紙を持ってたっていた。

「やっときたか。よし。答案を持っているな。さっそく、見せ合っぞ」

「ええ。勝負よ」

何十秒かった時。結果は明らかになった。

「やったあ。やったわ。やりましたわ。」

(こいつ浮かれ過ぎなんじゃねえか？急にお嬢様言葉になってるし)

そう。勝負は決まったのだ。俺は最初の英語以外全敗という結果になった。7教科で1勝しかできなかったのだ。

「んじゃ、早速お前の要求を聞こうか？体育祭で勝ってもおんなじ要求をするつもりだったんだろ？」

どうしたんだ。浦城がモジモジした。

「えっとね。あのね。ん〜っと」

「おい。とつとつ、言えよ」

「今度の休みに私の買い物に付きあって」

（なにかと思っただらそんなことか。）

「別にいいぞ。むしろ、そんなことなら勝たなくて付き合っ
てやるよ」

浦城は完全に俺の話聞いてない。軽くフリーズしているし。

「だから、浦城。付き合うから人の話を聞け。」

「ホント？やった〜。じゃ〜時間と場所は後で連絡するから」

（こいつなんなんだ？たかが買い物くらいで）

「わかった」

俺は教室に戻り、待っていた聖人に浦城との勝負に負けたことと

買い物に付き合う約束をしたことを話した。

「アウラ。それってデートじゃないのか？」

「どうして、そうなるんだよ。ただの買い物だろ」

「はあ〜。アウラ君。君って・・・」

「お前もあいつもわけわからねえな。んなことより、今日は疲れた。帰るぞ。」

「了解しました〜。」

第12話 結果・・・（後書き）

皆様たくさんアクセスありがとうございました。

ただいま第12話に突入しました。

この次はいよいよデートですね。どうなるのでしょうか？アウラと浦城2人は・・・。

でも、そんな私の作品を読んでくれる皆さんいつもありがとうございます。
ざいます。

更新の方させてもらいますのでこれからもよろしく、お願いします。

評価や感想も気が向いたらお願いします。

第13話 駅 店へ

「あゝ。今日も相変わらず眠いな」

ここはというと俺はあまりこない都会のとある駅の改札口前だ。

普段から外に出ない俺がなぜ、ここにいるのかと言うところある女の買い物に付き合っているせいなのである。

「あら？美崎君早いじゃない。10分前行動。さすがね」

そついいながら駅の改札口から出てきたのは俺を巻き込んだ張本人の浦城だ。

「遅れるわけにはいかないからな。私服だと一瞬誰だかわからなかった」

駅に集まってる男たちもチラチラと浦城を見ている。

（たしかに浦城の容姿は目立つからな。見てしまつのもわからなくはない）

「えっ。これ。似合っていないかな？」

浦城はちよつと焦つたように俺にむかつて聞いてきた。

「いや、似合ってると思うけど。」

いい終わると俺は浦城を見た。すると浦城の顔は完全に顔が赤くなっていた。そして、当然のように美崎は気が付かないのであった。

「あ、ありがとう」

「んで、今日は何を買いに行くんだ？」

俺は今日の本題を聞いた。早く行動してとつと帰りたいためだ。

「服を買いたいんだけど」

「服か。当然ながら俺は女物の服屋は知らんからな」

「わかってるわよ。だから、こっち」

浦城は俺の手を引っ張りながら先へ先へと進んでいった。

(これは手をつないだというものなのか)

などと俺は考えていたのである。

「でも、美崎くんが本当に来てくれるとは思わなかった」

「浦城の中で俺はどれだけ冷徹なんだよ。んで、どこ行くんだよ？」

浦城は美崎の手をつかんだまま話を続けた。

「着いた。ここよ。」

「ここか。早速入るんだろ」

俺たちはとある服屋に入るのであった。そして、浦城は色々な服を来ては俺に見せるファッションショーが行われていた。

「これは？どう？」

「いいんじゃないか。浦城って服が何でも似合ってる」

美崎がそういつと浦城は照れながら次の服の準備に入っていた。

「じゃ〜次ね」

(おいおい、長くねえか。そろそろこの店はいつてから1時間くらいたつぞ)

「はい。これは？」

「おっ。さっきよりいいな」

「ホント？ありがとう」

結局、浦城は服を買わずに終わるといふ結果になったのだ。なので美崎と浦城は店を出た。

「なんか、腹減ったからどっか飯を食べにいかね？」

「私もお腹すいてたんだ。どっかに入りましょ」

美崎と浦城は店に入ることとなった。

第13話 駅 店へ（後書き）

更新が遅れてしまい申し訳ありません。第13話まで執筆させていただきました。店に入っていた2人に待ち構えていたものは…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5915h/>

心の中は空

2010年10月8日23時01分発行